

調和のとれた世界に

加藤文子

贅沢なことに「奏デル盆栽」にはロゴマークがある。昭和六十年、私が三十歳の時、ささやかな盆栽園をはじめるにあたり、Goodyこと高木和雄さんがデザインしたものだ。

「ウィリアムモリス風にね」とか言ったら、文字を蔓のように伸ばして、そこに憩う小鳥を二羽描いて仕上げてきた。

開園の案内状もロゴマークを大きくあしらひ、地図や挨拶文をシンプルに載せてくれた。

盆栽園のイメージと、これからはじまりますというメッセージが色感からも伝わるよう、萌黄色を効果的に使ったり、あて名面の下半分を切り離すと名刺になるような工夫も施されていた。

ハガキという小さな世界に端正な美しさが備わり、伝達の役割もしっかり担っている。傑作といっても過言ではないと、再認識しているところである。

私の中では色褪せるどころか、輝きが増している。Goodyすごい！と、お礼を込めて握手を求



めたいくらいだ。

当時の私の感受性が豊かであったなら、もう少しましな反応もできただろうに……。残念ながら今の思いを、もっと深くなった感謝の気持ちを、他界してしまった彼に伝えることはできない。

最後の頃、普段行き来のなくなった Goofy から久々電話をもらった。「奏デル盆栽の本をつくってみたい？ お互いに仕事をはじめて三十年くらいになるでしょう。今ならおもしろいことできるのではないかしら……。」というものだった。

声を聞いているうちに、何かできるような気がした。

最初の打ち合わせで那須を訪れた時には、すでに扉のイメージをスケッチに起こして持参していた。タイトルは「Kanaderu Bonsai」、サブタイトルは「hope harmonious world since 1985」とあった。

奏デル盆栽のはじまり、覚えてくれていたのだ。

あらたに、F・Kのインシヤルが樹木のようにもみえる不思議なロゴも描かれている。

それを見ただけでも想像がふくらんだ。

打ち合わせの合間に、盆栽の庭や周囲の風景や夫のアトリエを撮影していった。

しばらくして、大まかな台割や撮りためた画像を構成したページのダミーをつくって届けてくれた。

短い滞在のあいだに感心するほど、美しいシーンをたくさん撮っている。

水がめとジョーロを真上から撮ったり、クローズアップした鉢の側面を通して背景にひろがる棚上の盆栽を写していたり、構図もトリミングも大胆でおもしろい。あちらこちらにセンスが光っていた。

生命を謳ったコンセプトを柱に、情景やことばをページにしていって作業を楽しみにしていた。

その後何度か打ち合わせを重ねたものの、実現しないまま Goofy は逝ってしまった。

ロゴや案内状、モノクロのポストカードシリーズ、二十代の頃盆栽をモチーフにして一緒に参加したペーパーマガジンなど、どれもが貴重に思われる。

遺された本のプランを改めて目にする今日、何処へ導かれるのかわからないけれど、抱えなおし、携えて、もう少し遊んでみようと思った。



高木和雄さん制作のロゴの入った案内状 1985年